

ラスト爲ス故ニ今日
ヲアランカ地方人心ニ
ルモノアラント信ス
恩命ヲ降シ給
及ホス効果大ナ

(勤王)



官秘第三 七 端

贈位ノ義ニ付内申

信州下俣郡旧大河原城主

故 香 坂 高 宗

右者征康將軍宗良親王及王子尹良親王
ヲ其ノ居城大河原ニ奉シ前後五十年間
ニ直リ無二ノ忠勤ヲ励ミタルモノニシ
テ其ノ忠肝義膽世ニ比類少ナキモノト
被認候執テハ今年秋冬ノ間ニ於テ行ハ
セラルヘキ即位ノ禮及大嘗祭ノ御大典
ニ際シ特ニ贈位ノ義
御沙汰ヲ賜リ候様御詮議相成度別紙奉
歴取調書相添、此段及内申候也

「香坂高宗」

(大正大礼贈位内申書卷六 内務省秘第 1316 号、国立公文書館所蔵)

大正四年五月三十日

長野縣知事力石雄一郎



内務大臣子爵大浦兼武殿

(勤王)

事歴取調書

信州下俣郡大河原城主

故 香 坂 高 宗

信濃國下俣郡大河原ニ居住シ其ノ附近
 興國元年征東將軍宗良親王ノ信濃國隸
 訪ニ入リ給フヤ香坂等主トシテ遙カニ
 之ニ應シ興國四年冬宗良親王ヲ其ノ居
 城大河原ニ奉ス之ヨリ大河原ハ征東將
 軍ノ根據地トナリシモ、如シ
 正平七年新田義興ノ足利尊氏ト武藏ノ
 小手指原ニ戦フヤ高宗宗良親王ヲ奉シ
 テ赴キ援ケシカ軍利アラズ

正平年間王子牙良親王香坂ノ居城大河
原ニ於テ産レ給フ
正平十四年高坂高宗民部卿光實并仔直
朝等ト共ニ鳥山國清ノ將江户某ヲ座先
寺ニ打テ宮方大ニ振フ
文中三年宗良親王ヲ吉野ニ赴カルヤ
牙良親王ヲ大河原ニ留メ藤原光實ヲ傳
タテシメ香坂ノ族心ヲ傾ケテ之ヲ奉ス
弘和二年宗良親王再ニ西上セントシ遠
江國井伊谷城ニ入リ給ヒシカ事未タ緒
ニ就カスシテ薨シ給フ供奉ノ臣香坂高
重還リテ之ヲ大河原ニ報ス牙良親王以
下勸哭ス

足利氏滿ノ部將某等大河原ノ支城松平
城ニ通ル高宗二男松平ニ耶力戰セシモ
力及ハスシテ退ケ
元中九年牙良親王知久敦貞ノ神峯城ニ
在リ上松朝宗ノ大軍之ヲ困ム香坂高宗
之ヲ救ニ富田若ニ陣シテ力戰シ困漸ク
解ク應永三年牙良親王浪合ニ薨去シ給
フニ及ヒ信濃ノ宮方頭首ヲ失フ
應永十四年三月廿七日高宗卒ス墳墓ハ
大河原ニ在リ永林院殿殯室良正ト謚ス
生前從五位下ト稱スルモ諱カナラズ

冬照

李花集常良親王ノ御歌
 信濃國大河原といふ深山に花を
 をのみ送侍しにさらけにいつとすつべ
 き明もなければま坂高家などか朝夕
 の霜雪を拂ふ志節しそのあとうたは
 ららんことさへかたけらいたく思ひ
 つゞけうれし

いはで思ふ谷の心もさうさけ
 刃をうもれ木とすくすなりやう

勤王

信州伊奈ノ神安子城ニ在リ宗良親王良
 親王ヲ奉ヒテ吉野朝ノ餘威ヲ振ヒ勤王ノ
 印房ニ命ジテ雖殺手明ナラズ位階ノ直否ヲ
 知ル由ナレ再査ノ後ニ護シ可也



信州伊奈ノ神安子城ニ在リ宗良親王良

付内申

知久敦貞

峯城ニ在リ宗良親王
 擁護シテ忠勤ノ誠ヲ

致シタルモノ有之且ツ知久氏ハ上告

ヨリ常ニ伊那地方ニ居住シ中世神峯城

ニ在リシカ後徳川氏ノ幕下ニ屬シ阿島

ヲ領有シ以テ明治維新ノ時ニ及ヒタル

無二ノ名家ニ候就テハ今年秋冬ノ間ニ
 於テ行ハセラルヘキ即位ノ禮及大嘗祭
 ノ御大典ニ際シ特ニ贈位ノ義
 御沙汰ヲ賜リ候様御詮議相成度別紙事

知久敦貞

長

予

系

【現代語訳】

贈位の義に付内申 信州下伊那旧大河原城主 故香坂高宗

右者征東將軍宗良親王及び王子尹良親王をその居城大河原に奉し前後50年間に亘り無二の忠勤を励みたるものにしてその忠肝義膽世に比類少なきものと被認候、就いては、今年秋冬の間に於いて行われる即位の禮及び大嘗祭の御大典に際し、特に贈位の義御沙汰を賜り候様御詮議相成度別紙事歴取調書相添え比般及び内申候也

大正4年5月30日

長野県知事 力石雄一郎（大正3～4年 長野県知事）

内務大臣子爵大浦兼武殿

（事歴取調書）

信州下伊那旧大河原城主

故香坂高宗

信州国伊那郡大河原に居住し其の付近を領す

- 興国元年(1340)、征東將軍宗良親王の信濃国諏訪に入り給うや香坂尊主として遙かに之に應し、興国4年(1343)冬、宗良親王を其の居城大河原に奉す。之より大河原は征東將軍の根拠地となったようである。
- 正平7年(1352)、新田義興の足利尊氏と武蔵の小手指原に戦うや高宗 宗良親王を奉して赴き援けしか軍利あらず。
- 正平年間、王子尹良親王 香坂の居城大河原に於いて産まれ給う。
- 正平14年(1360)、香坂高宗 民部卿 光資井伊直朝等と共に畠山国清の将を座光寺に打ち宮方大に振るう。
- 文中3年(1374)、宗良親王が吉野に赴いた際、尹良親王を大河原に留め、

ふじわらみつすけ いたつ
藤原光資を傳(仕える)かせて、香坂の一族は心を傾けて之を奉す。

- 弘和 2 年(1382)、宗良親王再び西上せんとし遠江国の井伊谷城に入り給いしか事未夕緒に就かすして薨(亡くなる)し給う。供奉(お供)の臣香坂高重(高宗の子、松平城主)還って之を大河原に報す。

尹良親王以下慟哭す。

- 足利氏満の武将が大河原の支城の松平城に逼る(押し寄せる)、高宗次男の松平二郎 力戦せしも力及ばずして退く。

- 元中9年(1392)、尹良親王 知久敦貞の神峯城に在り、上杉朝宗の大軍之を囲む。香坂高宗之を救に富田砦に陣して力戦し囲漸く解く。

- 應永3年(1396)、尹良親王 浪合(なみあい村、下伊那郡)に薨去(亡くなる)し給うに及び信濃の宮方頭首を失う。

- 應永 14 年(1407) 3 月 27 日、高宗卒す。墳墓は大河原に在り。

「永林院殿彈室良正」と諡す。生前、従五位下と称するも詳かならず。

〔参照〕

李花集 宗良親王の御歌

【信濃国大河原といふ深山に籠もりて年月をのみ送侍りしに、さらにいつと待つべき期もなければ、香坂高宗などが朝夕の霜雪を払ふ忠節も、そのあとかなからん事さへかたはらいたく思ひつづけられて

いはで思ふ谷の心もくるしきは身をうもれ木とすぐすなりけり】

(川端紅葉著 2026・2・22)